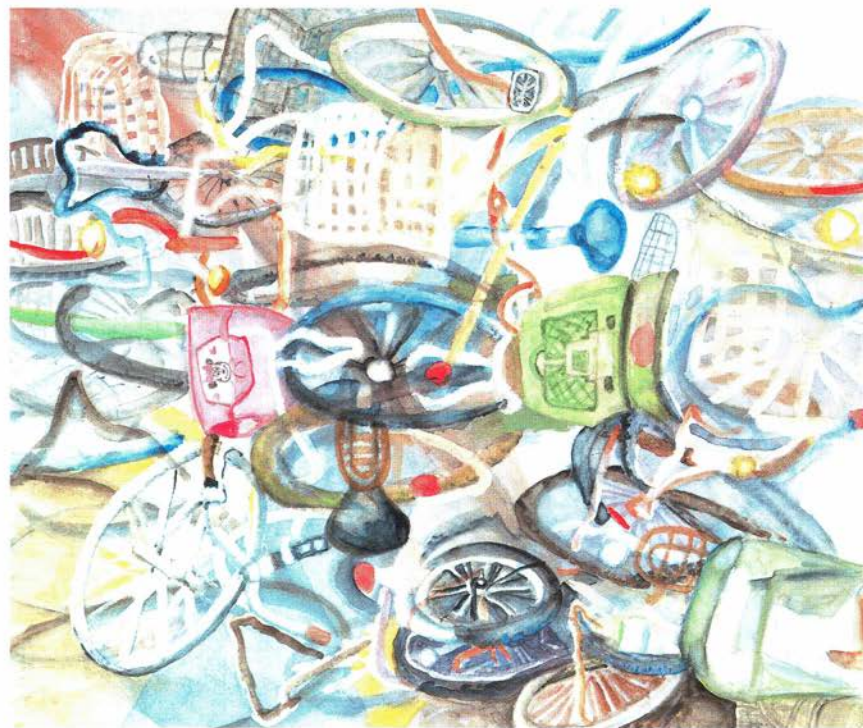


村野次郎創刊

# 香 蘭



2020年(令和2年)8月号

第97卷

第8号

通卷1076号

二〇二〇年(令和二年)八月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十七卷第八号



# 香 蘭

2020年(令和2年)8月号  
第97巻 第8号 通巻1076号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌 (60)	菅沼 はる子	表二
作品二、三特選 (六月号)	江口・岡野・中村(か)・松沢・三澤・武藤・河野・篠永・庄司・竹本・中島(絃)・藤本	2
近詠十五首 「八十八歳」	谷本朝江	4
作品		7
一		23
二		30
三		38
推薦香蘭集		39
香 蘭 集		20
村野次郎への旅 (125)	千々和久幸	22
歌の生まれる場所 (91)	小城勝相	44
エッセイ・自由研究 「妄想のコロナ」	宮口弘美	46
魚 点 (六月号) 「現在を詠む 新型コロナウィルス」	内藤美也子	48
作品一特選欄評 (六月号)	渡辺礼比子	50
七 首 抄 (六月号)	近藤・高田・古野・篠永	51
近詠十五首 「紅鮮らけし」評 (六月号)	朝香ふさ枝	52
作品評 (六月号) 作品一	石井雅子	54
作品二	関口静子	56
作品三	岩田明美	58
香蘭集	中島紘子	60
緑 地 帯	川原・塩田・大井田	62
文法あれこれ (15)	田中あさひ	65
歌会及び会合・他		68
編集後記・新宿日記		表三
表紙絵	中村 陽子 「重なり合って」	和雄
	目次・緑地帯カット	

村野次郎作品 私の愛誦歌（60）

# もの言へば白き歯が見ゆ生えそめてはつはつ

## 見ゆる白き吾子の歯

この一首は飯塚書店の『短歌用語辞典』に「吾子」の引用歌として選ばれています。

『樗風集』中、昭和三年作の小題「街のひかり」に（風邪三首）の詞書とともに入れられている作品であることから拝察すると、「多忙な先生が風邪をひかれてご静養の折、生え始めたお子様（中村富美子様）の歯に目を止め「歯が生えてきたね」とお子様に話しかけていらつしやる、そんなお姿が垣間見えては来ませんか。一読してどなたにもストンと納得のいく優しい歌です。

私わが身に添わせて一入の喜びを共感しているのは、昨年生まれた曾孫がまさにこの通りの白い歯がちらと見えて可愛いのです。その愛らしさは、この世の憂さを忘れさせてくれます。今、世の中は新型コロナウイルスで大騒動ですが、一日も早い終息を願って三密を守り、楽しい歌会が再開される日を待っています。

（短歌新聞社文庫『樗風集』107頁所収。『村野次郎三百首』には掲載されていない）

『樗風集』

## 四 選 者 の 作 品

今は嬉しく

平塚 千々和 久幸

新聞を広げ手足の爪を切る爪の一世を考えながら

ネジだつて釘だつてゆるむ関節が自制心までが緩みやがつて  
逢えば飲み逢えなくて飲みコロナブルー桜咲いても散つても同じ  
医師の友がケータイ通して言うことにゃ酒は一人でシヨボシヨボ飲めよ  
「分らない」とう感染症の専門家がテレビで今日も熱弁揮う  
思想などなくとも生きていけるぜと隣の驢馬に言つて嘸ますか  
意味もなく春の卵を茹でており意味なきことが今は嬉しく  
もの言わず工事資材を吊り上げる空っぽの袋が宙に消えたり

洗濯挟み

我孫子 丸山 三枝子

陸橋を降りてしばらくアカシアの花さく道につまずくわれは  
家中のカーテン洗い終わる頃カーネーションの鉢植え届く  
誰も来ず何処へも行かぬ卓上にカーネーションの咲き継ぎゆけり  
コロナ禍に籠もりておればつくづくとインドア派なる私であった  
待ちわびるならねどアペノマスクは我が家には来ず水無月に入る  
マスクする山鳩ならねくもれる朝な夕なのでつっぽぼう

雷雲の押し寄せきたる夕ぞらにもつと荒れよと吹きすさぶ風  
洗濯挟みに書類をとめし森岡貞香 洗濯挟み使えば思う

誰なのだらう

東京 桜井京子

いつにする、そろそろだねと浮き沈みしてゐる春の水鳥の群れ  
ここだけが世界のすべて川底の小蟹がはつか水を揺らせり  
日ざかりのハナミズキよりあらはれて誰なのだらう真つ白な蝶  
日暮れ時カラスの群れが騒ぎをり何人けふは死んだといふか  
誰でもが一つづつ持つ蠟燭の灯がゆらぎるむコロナ禍の春  
十年まへ歯が立たざりし歌一首読みなほし見てもまた仕舞ふなり  
郷里なる広島にコロナが出たといふかつてツチノコが出たことがある  
ふるさとの辛口の酒「西城」がわれを酔はせる帰る気はなし  
助けてください 横浜 渡辺 礼比子

転倒し動けぬ老婆かたくなに「病院はイヤ、コロナがうつる」  
甘露とぞエビアンを飲む三日三晩飲まず食わずで倒れいし人  
独り居の老婆倒れて一週間子等は来ず コロナが流行っているから  
町内の〈民生委員〉を確認し呼び鈴を押す 助けてください  
赤き灯を点滅させつつ救急車なかなか発たず小窓に見えて  
孫を得て祝がる人となりけり我の手柄というのでもなく  
悪月の不眠、胃もたれ、メランコリー 日記に見れば例年通り  
ある日ふと友がいたり 礼比子さんはすこしも水を飲まない人ね

# 作品二、三特選



(六月号作品から)

丸山 三枝子 選

## 〈作品二〉

サマーランド市 柏 江口 絹代

君たちが帰って二月日本はマスクの足りない国になり果つ  
去年咲きしカタバミの花の失せており母の古屋に雨降り止まず  
手を合わせいただきますと言いなさい 半分日本人の子に遺言す  
陽が差せば寒緋桜のひかりおり昨日のことは夢でありしよ  
本当はコルシカ島に行きたいが熱海でいいよ時間がないから  
コヨーテが夕暮れ時に鳴くところサマーランドに子は帰りゆく  
・カナダ在住の家族への思いがきびきびと詠まれ、母への思いも深い。

怖れつつ 尾道 岡野 甫 江

マスクしてマスクする世を怖れつつ確と食して眠るほかなし  
マスクなく消毒液もなき島に紋白蝶舞ひて鶯鳴くも

豆腐屋はどこから来るのか日のくれに売声たかく自転車でくる  
ふしくれし指の折りゆく新聞紙兜の形にすいと仕上がる

春の海霞みわたれば通学のフェリー二艘がおほろにゆき交ふ  
ウイルスにかかはりもなき春の空飛行機雲がぐん伸びて  
・滑らかなリズムに情感を乗せて詠む。一首目のリフレインが心地よい。

狂っていけるか

福岡 中村 かよ子

遅遅として去らぬ三月時間軸さえ歪めるか「されどウイルス」  
大真面目に狂っていけるかこの日々を我らが後に誰が名付けんか  
綱渡りのごとき空気とすれ違いマスクの上の目で語り合う  
「人類が見る一年後」なんていう映画を撮っているだろ誰か  
満杯でけれどどこかがスカスカの私も地球も一緒に回る  
幼子の戯れるごと咲き出だす野辺の花々人は愚かか

・ダイナミックな想像力と特異な見方で歌境の深まりを感じさせる。

時間が足りず

さいたま 松 沢 みどり

ジンジャーの香りを鼻で吸い込んで入浴剤を湯舟に落とす  
おしんを見よとすすめる夫に促され一緒に見れば先に泣く夫  
珈琲館はクリーニング屋に変わりおり三軒先にはコメダ珈琲  
道端に落ちた自転車の鍵が転がったまま数日が過ぐ

頑張った分だけ時間が欲しいもの頑張るほどに時間が足りず  
・五首目では、道理の外にある人生の真実を掬いあげた。

手 提 げ

横浜 三澤 幸子

咲きおえし鉢を預けた友は逝きアツツ桜に春はめぐり来  
わが居間のテレビは最大公約数人畜無害のチャンネル1に

感染者増えゆくグラフ日々見つつ端布ボチボチ手提げに仕上ぐ

・アイロニカルな視線で現代や暮らしを手堅く詠む。

### 非日常に

東京 武藤 昭彦

香港から武漢へニユースの移りゆく 香港のマスク武漢のマスク  
ひそやかな中国語聞く「ひかり」にて令和二年の春節のころ  
非日常を求めた豪華クルーズが非日常に閉じ込められる

・コロナ関連の一首目の下旬に納得、三首目はこの非日常の奥を問いたい。

### 〈作品三〉

### 冬の雷

鎌倉 河野 慎二

掃除屋の午やや遅き掛蕎麦に割る十五夜のさまに玉子を  
さみしさに空を眼は乞ふものを彼岸と此岸を断つ冬の雷  
売り払ふ古書のうちにもわが胸を撃ちしインクの書込みの赤

・一首目は不熟、二首目は独善に過ぎたか。将来性への期待は大きい。

### 雪の降る町

川崎 篠 永路 子

障子戸を開けて眺むる白き町太郎も次郎も今は寝ている  
週末の外出自粛に降る雪よ町の浄化のされてゆかんか  
想い出はいらねど弥生三月の雪の降る日に昭和を想う

・春の雪のテーマで詠んだ。三好達治のフレーズを踏まえた一首目がいい。

### 三月の雪

横浜 庄 司 健造

そつとしておいてくれぬか歳晩の歌を詠むとき酒をのむ時  
廻りいる港みらいの観覧車 大黒埠頭の灯さみしも

モチーフはおりがみという新駅に音もなくふる三月の雪  
声援も歓声もなき土俵なり呼び出し次郎の声は満ちゆく

・肉声の間こえる一首目も、軽妙なタツチの叙景三首も心地よい歌。

### パンデミック

千葉 竹 本 幸子

目に見えぬウイルスの恐怖映像は混乱つづく世界をうつす  
待ち受けるはどんな未来かパンデミックすべては最初の一人なりしよ  
傘をうつ雨音聞きてバスを待つ誰もが最後はひとりと思う  
寄る辺なく空缶カラコ口転がってもうすぐ父の三十三回忌

・身辺の機微が拘われた中でも、二、三首目の主観を込めた歌が面白い。

### 改ざん

別府 中 島 紘子

改ざんの「ざん」の漢字は穴鼠あなねずみみるから悪わるの字づらをしてる  
街中の畑に重機が入り込み花ふみしだき鎮座まします  
さつまいもの収穫できたか畝の上のブルドーザーは何も知らない

・機知に富んだシニカルな詠み口のなか、一首目の口調が痛快である。

### 路の臺

常陸太田 藤 本 佐知子

露の臺顔出すころかと来てみれば首伸ばしおり摘めとばかりに  
終活の衣類整理は思い出を引き出しやまずあの日あの時  
捨てるのにためらいあればもう少しわれに残るかこの世の時間  
過ぎ去りし日は短くて老老の介護の長し 桜満開

・手堅い一連の四首目の飛躍に立ち止まった。桜は境涯詠に相応しい。

# 八十八歳

谷本 朝江

零細のそのまた零ゼロの企業なり淘汰の洗礼をくぐり生き来ぬ  
安穩に過ぎ来し日々にあらずして資金難にて奔走したり  
起業の頃の試行錯誤の日記帳亡つま夫の苦勞を今更偲ぶ  
ビーカーに染料何種も混合し色出し試験の出発地点  
変動の波にもまれて廃業の危機に出合いし暗き日々あり  
酷使せる体に鞭打つ妻ならね同志の如き夫婦かも知れず  
顧みる歳月すでに六十余年経理のつとめいま引退す  
生涯を現役で過ごす心づもり見事にくずれ只のばばなり  
申告を終え幾許の税を納めわれは大きく深呼吸する  
夫逝きて早やも二年ふたとせ子らに託すこの生業を守り給えよ  
令和二年五月吉日八十八歳使用期限切れにて現役引退

ひと言随想

余生

来世もわが身は夫と共にあり確かめん術すすべでに無けれど

自らを褒めてやらんと足に合う値の張る靴を選びいるなり

引退は来たるべくして来しものかこの年大腿部骨折の惨

夫つま送り仕事を離れ八十八歳余生の今を如何に過こさん

主人が亡くなって丸二年になろうとして  
いる。三年余りの入院生活の末、一昨年  
のあの焦げつくような猛暑のさ中、静かに逝いつてしままった。

結婚して六十余年、自営のため、ほとん  
どの時間を共有してきただけに、ぼっか  
りとの間に開いてしまった状態から抜  
け出すのには少し時間がかかった。

今、やっと仕事を離れて自分だけの時間

は充分あるのだが、心の緩みもあつてか、  
大腿部骨折の難に見舞われてしまった。  
現役引退、骨折、新型コロナウィルスの  
蔓延等の難に出合ってしまったが、これ  
を踏み台に奮起する年齢でもない。

名もなく、才無く、財の無く、ないない  
づくしのわが身ながら、あと何年の生か  
も不明だが、今は日常をいかに過こして  
ゆくかが課題であるともいえよう。



「ザムボア」と次郎 (十七)

千々和久幸

「ザムボア」(朱樂) 第四卷第七號(大正七年七月七日發行)に掲載された村野次郎の「雜詠」八首を読む前に、目を慣らすために同時代の他の作品を読んでおこう。「目を慣らす」とは、これまでは村野作品を中心に読んできたが、いったいこの時代の感受性が他の作者にどう歌われていたかを知るためである。さいわい「ザムボア」には毎号、愼吾、次郎による歌評が掲載されているので、それを見ておくことにする。以下の批評は、六月號所収(五月號作品)のものである。

・ゆくりなく闇路を來つれ速々にせせらぐき  
 けばこころゆらくを 篠井 嘉一

○村野。歌に慣れ過ぎて熱がなくなつて來た言葉ばかりが際だつてゐる、自然に對する感動が稀薄になつて來たのだ。技巧ばかりが歌にふらさがつては困る。一考を煩したい。

○河野。或程度まで前評者の言葉に賛成をする。熱し最近篠井君は昔の態度を改めて、新らしく突き進まんとする努力が見える、やがて進むべき大道が展開されて來るであらう。扱てこの一首の一句「ゆくりなく」は落ちつかぬ、此場合の感情に伴はぬ言葉である。も少し的確な言葉があるやうに思はれる。境地はあながち悪むとは思はれぬ。勉強して下さい。

村野、河野ともに較しい批評である。村野評は技巧的な言葉よりも、対象を掬う素直な氣持の方を重視している。「熱がなくなつて」は原文のままだが、「熱(こく)がなくなつて」と読ませるのだから。

また「言葉ばかり」は前の行の「……なつて來た言葉ばかり」と次の行に続くのか、「來た」で切れるのか、行末に句読点がないので

判然としない。先に河野評の「熱し最近篠井君」はの「熱し」は、手元の辞書にはない。原文は「執+れんが(読点4個)」である。意味的には「然し」だがこのままおく。

かくのごとくこの時代の誌面は、評者の知識不足もあつて旧字に加えて、新旧仮名遣いの混同、誤字・脱字さらには読解不能の文字が頻出する。校正子の不備もあろうが、これを言い出すと切りがなくなる。話が逸れた。河野評に戻ろう。

「ゆくりなく」が問題視されているが、一首の雰囲気からすれば、二句以下の文字通り「際だつ」光景を誘い出す役目を担う、この寄辺なく茫漠たる氣持は、もつと作者の意を汲んでもよいのではあるまいか。

・山路にのほりつかれて佇みつあはげば寂び  
 しみねの松風 深野庫之介

○村野。三句の「佇みつ」は此の歌をたるましてゐる、結句の「みねの松風」は他所行過ぎるやうに思ふ、風の音が響いて來ないやうだが此處が歌の面白さなのだから。それから單なる寫生で畢つてはいけない、作者の感覺や感動がひしひし觀者に迫つて來る程な寫生がされてゐなければ尊い寫生歌

とは言へないと思ひます。

○河野。此の場合四句が少し無理であつたかも知れぬ。仰いで松風の音を聴いたのでなく自然に松風の音が耳に響いて来た位に表はせばもつと効果があつたかも知れぬ。上句がまつて居るのに下句が延び過ぎた傾きのあるのも注意すべき所であらう。

ここでも村野評は的確だが厳しい。というより、図らずも村野の写生歌への指向が窺えるところが興味深い。河野評も難しい注文だが、真つ当なものだらう。

さて村野次郎の「雑詠」八首を読もう。

①雨やみて朝かぜ涼し野菜賣る舗に女の足白く見ゆ

②たまさかに屋根にのぼれば隣家に咲きて明かるきいちのはつの花

③曇日の櫻の幹に虫多し昨夜の雨に生れたるならん

④蘭の花盛りて白き小闇より蛾の飛び出づる浅夜にありけり(立夏)

⑤家暗らくしげりて栗の花咲けど言葉すくなく暮らす日多し

⑥さみだれに繁げる樹蔭の土蔵の壁しめれる

ままた夕べとなりぬ

⑦さみだれの暗らし樹かげをしととと草鞋はく人わが家に来るも

⑧薔薇の木にせわしき蟻ののほり下り梅雨の晴れ間に明きらく見ゆ

先に村野先生の歯切れのいい作品評を読んではまうと、実作が批評を越えることの難しさがよく解る。後年の先生の作品を知っている読者には、一連の作品の調子の低さが目立つのも致し方あるまい。先生はまだ早稲田大学在学中で、弱冠二十四歳。読者もその目で作品を鑑賞せねばなるまい。

①の歌、眼目は下句の「女の足」の白さ。そこにひんやりとしたエロスを感じてのことだ。わたしも先生と同年代なら、きつとこんな歌を詠んだらう。

それにしてもそこに行き着くまでの道具立てが、少し煩わしくはあるまいか。

②の歌、問題は初句、先の筏井作品評に見た「ゆくりなく」と同じことが言える。不用意な初句と今なら言えるが、ここでは下句の梅雨の晴れ間を思わせる解放感を讀みたい。

③の歌、初句を説明と見るか表現と採るか

が難しい。しかし焦点は、一晚のうちに夥しく生まれ出た虫の生命力(繁殖力)への素直な驚きを読むべきだらう。

④の歌、初句は無難だとしても、結句が理に即いてはいまいか。現在の「香蘭」の歌会なら、結句は直截に「立夏」を表に出した方がよい、などと言われそうだが。

⑤の歌、一読して梅雨どきの鬱陶しさを感じる。鬱々とした梅雨の日が続けば、青年なら尚更塞ぎ込みたくなる。「栗の花」だけは華やいているという所に、鬱屈した気持の出口を見出し救われた歌。

⑥の歌、村一番の雑貨商であつた先生の家には、土蔵の倉庫もあつたのだらう。また広い屋敷内には大きな樹も繁つていた。そして壁の湿りは当分乾くことはなかつたのだ。

⑦の歌、草鞋ばきは、たまに目にする出入りの商人だつたらうか。ハイカラな家風の村野商店に、草鞋は珍しかったに違いない。

⑧の歌、梅雨曇りの慰まぬ日が続いた後にこの歌を讀むと、突如天井が開いたようで読者も救われた気持になる。さあ今の内にと蟻だけではなく、人も動き出す。一首の情景が周辺の変容を描き出している。